朝鮮時代後期の社会変化と民衆意識の成長

—近代仮面劇の成立をめぐって—

張　　起　權（チャン キグォン）

要　旨

17世紀以後の韓国社会、当時の朝鮮王朝は、都市の発達に伴って近代的な初期資本主義社会へと徐々に移行していく。朝鮮王朝において封建社会の基盤を成していた身分制度と地主制度を中心に、その崩壊の過程について考察する。また朝鮮時代後期の社会変動に伴い、伝統仮面劇「タルチュム」の世界にどのような変化が生じたかを分析する。

厳格な身分制度のもと長い間抑圧されていた民衆意識は、封建社会の解体とともに目覚め、成長していく。その過程でタルチュムの世界においても、地域限定的・閉鎖的な構造を持つ農村型タルチュムから、演戯地域や参加者の面で開放的な構造を持つ都市型タルチュムへと変貌していくことになる。つまりタルチュムは農村の祭儀から民衆芸能へと変容し、現在のタルチュムとほぼ同一の形態を持つ「都市タルチュム」が成立するのである。

キーワード：朝鮮時代、身分制度、民衆意識、都市タルチュム

1．はじめに

朝鮮王朝は、14世紀末、当時の高麗王朝における最高実権者であった李成桂[1]によって創建された。李成桂の政権基盤は、高麗末期から台頭した新興儒学者らによって支えられており、朱子学的政治思想が国家理念として全面に打ち出された。すべての社会的価値を朱子学のもとに規範化し、その上に現実的秩序を築き上げることで、自分達の政

1）朝鮮王朝の始祖。高麗末期の武将であったが、1392年、高麗王朝を滅亡させ、朝鮮王朝を創建する。

治・社会的地位を確保しようとしたのである。また仏教を排斥し儒教を崇拝するという「抑仏崇儒政策」を掲げ、仏教を国教とした高麗王朝の末裔に対する牽制と弾圧を行った。

朝鮮王朝の政治体制は、建国直後こそ高麗時代の制度を継承する側面もあったが、次第に独自の体系が確立されていくことになる。また朝鮮初期の身分体系は、基本的に高麗の「文武両班体制」を引き継いだが、朱子学に基づいた特有の階級思想を築き上げることで、絶対王権と両班階級の間の調和の取れた体制作りに成功したのである。

身分体系は世襲を原則とし、非常に厳格で、各階層間には確固たる境界と隔たりがあった。支配階層であった両班はみずからの権力維持のため、下層民に対し厳しい差別と抑圧を行っていた。しかし17世紀に入ると、朝鮮王朝では社会的混乱が生じ始め、各方面において改革が行われると同時に、厳格な身分制度にも次第に変化が生じることになる。

そのような社会変動の中で、農村から都市へと進出したタルチュムは、抑圧されていた庶民の鬱憤を発散し、民衆意識を高揚させることに非常に重要な役割を果たしていた。とりわけ、政治的、社会的、経済的感覚に敏感であった商人や没落両班層などにとって、社会風刺に富んでいるタルチュムの内容は、既成の秩序を批判し新しい価値観を普及していく格好の表現様式であった。彼らの参加によって、タルチュムの中には成長していく民衆意識の様相が確実に反映されることになる。

本稿では、地主制度や身分制度の崩壊に象徴される朝鮮時代後期の社会変化の様相を分析すると同時に、その過程でみられる民衆意識の成長、また当代の民衆意識が最も顕著にあらわれるタルチュムの変遷について考察を行う。

2．朝鮮時代の階級思想と身分制度

建国から約100年後の成宗5年（1474)、『経国大典』の完成を機に朝鮮王朝の執権体制は完全に確立されることになる。『経国大典』は朝鮮王朝の政治・経済・社会的構造の根幹を成しており、以後王朝が滅亡するまでの約450年間、多少の修正が加えられるもののその基本体系はほとんど変わらず、政治体制の基本理念となる。中でも官僚を登用する目的で行われた科挙制度は、当時の教育制度や民衆の価値観にまで大きな影響を与え、儒教的な階級思想や身分体系を維持する基盤となった。

階級思想の根底にあるものは儒学思想であるが、その中でも特に朱子学の倫理・道徳思想である「三綱五倫」が基本になっている。三綱とは、‘君為臣綱’‘父為子綱’‘夫為婦綱’であり、すなわち父子・君臣・夫婦の関係を規定する思想である。また五倫は親・義・別・序・信から成っており、これらは本来、不平等な人間関係を前提にした身分倫理ではなく人間同士の信義と秩序を重んじる教えであったが、三綱と結び付くこと

によって厳しい階級社会を支える倫理と化した。このように、朱子学的倫理観は朝鮮王朝の厳格な身分制度の基礎理念として、政治的・経済的・社会的構造の根本になっていた。

では、朝鮮時代の身分制度はどのような構造を持っていたのか論じることにする。当代の身分体系は、一般的に四層構造が用いられていたが、三層構造、またはより細分化された七層構造まで存在していた[2)]。

〈三層構造〉 1．両班　2．良人　3．賤民

〈四層構造〉 1．両班　2．中人　3．常民　4．賤民

〈七層構造〉 1．王家　2．両班　3．郷班・土班　4．中人
5．庶子[3)]　6．常民　7．賤民

以上の分類法の中から、最も一般的に用いられていた四層構造を中心に、各階級の特徴について概略してみよう。

両班は、高麗時代・朝鮮初期においては‘文班’と‘武班’の両勢力を指す官制上の用語であったが、徐々に上級支配層を表すようになる。両班は原則として、科挙制を通じて選ばれた現職の官僚を指すが、儒学的知識と思想を持った知識人一般を示す場合もあった。また後に、先代の官僚経歴が四代以内にある者のみ両班としての世襲的身分が保障されるようになり、四代続けて官職に就任できないと常民に転落する制度が設けられた。両班は、土地や禄俸[4)]の受給、税金や兵役の免除など、政治・社会・経済的に優遇される特権階級であった。

中人は、狭義においては中央の技術職官吏を指し、広義においては中央と地方の下級官吏や庶子までも含まれる。職業は主に技術・専門職であり、会計官、医官、司法官、通訳官、気象官などを担当した。中人は、知識と職務能力はあるが、両班と常人の間で身分が固定されていたため、地位や仕事において向上をはかることができなかった。しかし次第に実務者としての実力と影響力を増していき、朝鮮中期以後は全国的に大きな勢力を形成するほどになる。またこの階層が、タルチュムの演戯を管轄し、演戯集団を管理することになる。

常人は、農工商に従事する生産階級であり、その絶対多数は農民であった。この階級は納税・軍役をまかなう被支配階級ではあったが、少数の農民は中小地主として奴婢[5)]を所有する場合もあった。朝鮮時代後期になると、経済力をつけた常人が両班の地位を

2）李萬甲「韓国農村の社会構造」『韓国研究叢書』第5集、1960、pp. 4－5。
具滋均『韓国平民文学史』（ソウル：大光文化社、1974）、p.195。

3）両班の正室でない妾の子孫。両班としての身分を認められず、両班から差別を受けていた。知識はあるが、官職に付くことができなかったため、文学や芸術方面に熱中する場合が多かった。朝鮮時代後期には、庶子文学というジャンルを築くほど、文学・芸術方面で多くの人物が頭角をあらわす。

4）一種の禄高。両班が受け取る年金のようなもの。文武18等級に分類されていた。

5）一種の奴隷。反逆者、犯罪者、戦争捕虜、またその子孫も世襲で奴婢になった。

買収し、身分の向上を図ることもしばしば起こるようになる。

階級構造において最下層に位置するのが賤民である。その中でも典型的な身分が奴婢であり、王室や公的機関に属する公奴婢と個人に仕える私奴婢に分類される。公奴婢には官奴卑、寺奴卑、駅奴卑などがあり、原則的に私有の住居を持ち独立した生活をしており、私奴婢に比べ社会的地位が高かった。私奴卑は主である両班の家に居住しながら労働を提供するのを率居奴婢といい、すべてのことに束縛を受ける身分であった。それに対して外居奴婢は、独立した家屋と家計を維持し、奴婢貢という物資を奴主に上納していた。これらの奴婢は人格のない財産とみなされ、売買・相続・贈与の対象になっていた。奴婢以外にも賤民には白丁[6]、僧侶、巫女、娼妓などがあり、タルチュムの演戯階層であった廣大もここに属する。

以上のような身分体系は世襲を原則としていたため、各階層間には厳格な境界と隔たりがあった。支配階層であった両班はみずからの権力維持のために、下層民に対し厳しい差別と抑圧を行っていた。

しかし16世紀後半から17世紀中半にわたり、四回に及ぶ外国からの侵略を被った朝鮮王朝では、社会的混乱が増大し始める。また同じ時期、中国においては明の滅亡と清の創建に伴い、空理空論に没頭する朱子学が排斥され始め、現実と事実に基づく実証的学問が提唱されるようになる。朝鮮王朝でもこれを受け、各方面において改革が行われ、厳格な身分制度も徐々に揺らぎ始めることになる。

3．朝鮮時代後期における封建社会の解体

3．1　地主制度の変化と貨幣経済の成立

朝鮮時代後期に入ると、身分制度を基盤とする封建的体制が揺らぐことになるが、その社会・経済的背景を検討してみることにする。

18世紀以後朝鮮王朝では、移秧法（田植え）の普及などにより農業生産力が増大するとともに地主と小作の関係が普遍化していく。それに伴い国家的封建制は事実上崩壊し、地主中心の農業生産様式に変化していくことになる。このような変化は、農業における生産様式の移行にとどまらず封建体制の崩壊の契機につながっていく。

では、農業の発達および地主制の変化、商品貨幣経済の成立、身分体制の崩壊を中心に封建社会の解体過程を考察してみることにする。

高麗末期の14世紀には、貴族の大土地支配が拡大することによって受田不能となった官僚層からの不満が高まっていた。1390年、李成桂を中心とした新興官僚達は、この不満を背景に、量田事業で全国の土地を掌握した上で、公私の田籍を抹消するという大々

6）屠殺や肉類の販売などに携わる身分。

的な土地改革を行った。さらに翌年、首都圏の土地は18等級に分けられた文武官僚に再配分して収租権を与え、それ以外の地域の私田はすべて国家の収租地すなわち公田とする「科田法」を実施した。この科田法によって土地を没収された高麗の王族や貴族は一夜にして没落し、朝鮮王朝の成立基盤が形成されることになる。

このように高麗時代末期に新興官僚達によって実施された科田法は、朝鮮王朝の成立以後も国家の土地制度として引き継がれ、国家的封建制の基盤となった。科田法の実施で、高麗末期以来混雑を極めていた土地所有関係が整理され、佃戸[7]の耕作権が保証されるようになった。

しかし、当初の思惑とは裏腹に科田も次第に世襲化され、地主と小作関係が固定化すると同時に、大土地支配が徐々に拡大していった。結局科田法は身分や階級による土地分給制と世襲制のもとで、国家的封建制の確立に繋がったのである。

15世紀中盤に入ると、増加する官僚群に支給する科田が次第に不足し始め、科田法はついに崩壊に追い込まれていくことになる。1466年、科田法の矛盾を打破するために、実職に付いている官僚だけに受田を限定する「職田法」が施行される。

職田法の実施によってかつての大土地支配や世襲が抑えられ、結果的に小農民の自立化が進むことになる。そして、定額地代を支払う賭租法[8]を中心とする新たな地主経営段階へと移行していくのである。

朝鮮後期における小農民の自立化とは、労働力地代という経済外的要素による労働の強制収奪から、契約による生産物の分割という、いわば生産物地代への発展を意味しており、これに伴って農民らに階級意識が芽生え始めることになる。

また16世紀後半から17世紀にわたり、壬辰・丁酉倭乱[9]や丙子胡乱[10]など外国からの大規模な侵略を受けた朝鮮では、全国的に土地が荒廃し、大量の流民が発生していた。これを克服するために、国家的な開拓事業が実施されると同時に、農民層は生産力を増大させるため従来の農業法の改良を試みた。こうした過程で、土地の私的所有が増えるとともに、移秧法（田植え）の普及により単位面積当たりの労働力が大幅に軽減されることで、農民の広作運動が広がることになる。

以上、朝鮮後期の農業における変化は、開拓による農地の拡大、移秧法など農業技術の発達、土地の商品化、自由農業経営の拡大などに集約することができる。

このような農業生産力の発展と広作運動のみならず、当時の商品貨幣経済の成立と発

7）地主から土地を借用し耕作を行った後、借用代金を支払う小作農。
8）予め小作料を定め、収穫量に関わらず一定の小作料を支払う方法。小作料が豊凶に左右されないのが特徴。
9）1592―98年（文禄１―慶長３年）、豊臣秀吉は２度にわたって朝鮮王朝を侵攻する。日本では「文禄・慶長の役」というが、韓国では当該の年の干支を取って「壬辰倭乱」「丁酉倭乱」と呼ぶ。
10）1636年（仁祖14年）に起きた清による朝鮮侵略。

展に伴う商業的農業の展開もまた朝鮮後期の農業変化を理解する際の重要な要素である。商業的農業とは、市場販売を前提に一般農作物だけでなく特用作物を栽培する農業法である。地主の農地を借地し大規模農業を行う経営型富農層の農業方式がこれに当たる。また商業的農業の場合、必要な労働力をほとんど賃金労働者によって充当していた。これによって農民層では広範囲な両極分解が行われ、一部の農民層は直接生産者から農業商品生産・販売者へと移行するようになった[11)]。

また貨幣経済の発展に伴い、地代の支払方法にも変化が起こり、封建的な地代の最終形態である金納制が誕生する。朝鮮時代における地代の形態は、打租制（並作半収）⇒賭租制（定額地代）⇒金納制（貨幣地代）のように変化していくのである。

このような農業経営の変化により、18世紀以降は封建的地主制の弱体化と農民層の分化がさらに拡大していく。特に地主の土地兼併が増大するにつれて農民層の分化は一層加速化することになる。すなわち佃戸的小農民が新たに庶民地主になったり、土地から離脱して賃金労働者になったりしたのである。

この時期の社会階級を農業の基準でみると、地主、広農経営者（経営型富農）、小農経営者（貧農あるいは小作人）、農業労働者に分けることができる。身分制度に基づき強制力に頼っていた階級関係が、経営型富農と庶民地主の登場に象徴されるように、土地所有を基準に再編成されることになったのである。このように地主制の変化は、従来の身分的隷属性の弱化をもたらし、新たな経済的隷属関係の台頭を意味するといえる。

以上のように朝鮮時代後期には、農法の改良と土地の商品化、佃戸の身分的隷属性の弱化と庶民地主の登場、貨幣地代の発生と経営型富農の成長などの変化が行われた。これにより封建的土地所有、すなわち地主と佃戸間の身分的土地所有から次第に近代的土地所有制度へと移行し、封建社会は根本から揺らいでいくことになる。

また朝鮮後期において商品貨幣経済および商業資本の成立問題は、封建社会の解体過程を考える際に非常に重要な論点である。

17世紀以前まで朝鮮の商業活動は、支配階層による牽制、商人に対する差別、交通施設の不足などで非常に萎縮していた。しかし1608年に実施された大同法を契機に経済体制に大きな変化が起き始める。大同法は、農民に課されていた貢納・労役の義務を土地課税に切り替えた画期的な税制改革で、所有地の規模に応じて米や布を納めるようにした制度である。大同法の実施は、商品経済の発展に追い打ちをかけることになり、金属貨幣の流通と交換経済の発達に繋がっていく。さらに社会全般において生産力が向上し、相当の経済力を持つ常民が多く登場するようになる。

都市商業の場合、支配層から特権が与えられていた御用商人、すなわち貢人や市廛商

11）イ・ホチョル「朝鮮時代農業史」『韓国の社会経済史』（ソウル：ハンギル社、1987）、p. 87。

人らが市場を独占していたが、次第に乱廛のような私商も増えていく。それ以降約100年間にわたって市廛と乱廛は激しい勢力争いを繰り広げるが、私商らはさまざまな妨害や圧力を受けながらもその勢力を拡大していき、17世紀末には私商が商業活動を主導するようになるまでに至る。

ここで注目すべき点は、私商はその性格上、特権を享有していた御用商人や、それを育成していた封建体制に対して反感を持っていたということである。したがって私商の台頭は必然的に支配秩序の混乱を招き、支配層による統制力の弱化に繋がっていったのである。

3．2　身分制度の崩壊

朝鮮時代において身分制度は、封建制を維持するために最も重要な役割を果たしていた。したがって、身分制度の動揺と変動、またその崩壊は封建制の解体過程と深く結び付いている。

17世紀頃から徐々に揺らぎはじめた身分制度は、18世紀に入るとより広範囲にわたる変動が起こり、19世紀末にはほとんど解体されることになる。身分制度の変動の様相は、農業生産力の向上や商品貨幣経済の活性化に伴う常民・賤民階級の身分上昇と支配層の影響力低下としてあらわれる。

朝鮮王朝の支配層は科田法などを用いて身分と経済力を一致させることで、封建制を維持してきた。しかし朝鮮時代後期になると、政権から脱落した残班（没落両班）らが農業や商業に参加することで経済力を付け、大地主である閥閲両班（支配両班）と対立するようになる。また奴卑層の急激な減少と、庶民地主や新興商人などの新しい階層が成長することによって、身分制度は社会的かつ経済的にその根幹が揺らぎ始めることになる。

朝鮮後期の戸籍と土地台帳を分析したキム・ヨンソブ、チョン・ソクチョンの研究によると、17世紀以降に急激な身分間の変動が起こっていることが分かる。これらの研究を総合的にみると、17世紀後半に両班：常民：賤民の比率が大体１：４：５であったのに対し、18世紀には２：５：３に、19世紀には７：２：１程度にまで変化していく[12)]。

具体的な例として、慶尚道の蔚山地域を中心に18世紀以降の身分別戸口を調査したチョン・ソクチョンの研究をまとめてみると、18世紀中盤にはすでに奴婢層の身分上昇が積極的に行われていたことが分かる。それ以降も持続的に上昇傾向をみせ、19世紀後半に入ると、実に３戸のうち２戸までが両班になり、奴卑は１％にも満たなくなる[13)]。

12）キム・ヨンソブ『朝鮮後期農業史研究２』（ソウル：一潮閣、1971）、チョン・ソクチョン「朝鮮後期社会身分の崩壊」『大同文化研究』第９集（ソウル：成均館大学、1972）参照。
13）チョン・ソクチョン、前掲書、pp. 267－357。

すなわち、被支配階級の人口は急激に減少し、両班の人口が大きく増加していたのである。人口構成をみる限り、事実上の奴卑解放に近い状況であったといえる。

朝鮮時代において身分制度は生産階級を体制の秩序の中に束縛する役割を果たしてきた。しかし17世紀以降は生産・流通構造の変化によって封建的な従属関係が弱化し、支配体制の基盤が揺らぐことになり、徐々に身分制度そのものが崩壊していったのである。

また身分制度の解体には、より直接的な原因を挙げることもできる。とりわけ19世紀に入り大小40回以上も勃発した農民蜂起は最も重要な役割を果たした。朝鮮王朝における19世紀は一言で農民蜂起の世紀ともいえるほど、全国的な規模において農民による蜂起と民乱が断続的に続いていた。

その中でも平安道農民戦争＝洪景来の反乱（1811)、壬戌農民蜂起＝晋州民乱（1862)、甲午農民戦争＝東学革命（1894）は、その規模と意義が特に大きいため19世紀の三大民乱といわれる。これらの農民蜂起に共通している特徴は、民衆（農民）が自分たちの権益擁護のために自主的に立ち上がったこと、また長年にわたり従属関係にあった支配階層（両班）に対して真正面から挑戦したということである。

以上のように、朝鮮時代後期における被支配階級の抵抗および身分制度の変化は、17世紀以降、農業および商業において広範囲に行われてきたが、本質的な意味の身分解放は19世紀以降、全国的に広がった農民の解放運動によって成し遂げられたといえる。勿論このような成果は、長期間にわたり民衆の自立意識が成長し蓄積された結果である。

４．近代タルチュムの成立

前述のように、17世紀以後の朝鮮王朝は、農業の変化や貨幣経済の発達に伴って近代的な初期資本主義社会へと徐々に移行していった。また学問的には、朱子学に代わり実利と実証を重視する新たな学問、実学[14] が台頭する。同時に初歩的な市民社会が形成され、民衆意識が芽生え始めたことで、民衆芸術も全般的に発展を遂げるようになる。その過程で、長年にわたり農村を舞台に定着していたタルチュムも、その時期から転機を迎えることになる。

タルチュムの変貌を具体的に考察する前に、タルチュムに関する基礎的事項として、韓国の伝統劇におけるタルチュムの位相、タルチュムの辞典的意味、またその類型について踏まえておくことにする。

現在韓国において伝承されている伝統劇は大きく三種類に分けることができる。それ

14）本来儒教における実学とは、道徳的実践の学問のことである。ここでは、17世紀以降、朱子学の虚学化に対する批判として登場した学問運動を指す。実証性と合理性に裏付けられた現実有用の学問という意味を持つ。

は、人形劇[15]とパンソリ[16]、そしてタルチュムである。20世紀初頭までは影絵劇[17]も存在したが、1920年代にその伝承が途絶え、現在は記録のみが残っている状況である。

タルチュムの場合は、その優れた演劇的かつ文化的価値にもかかわらず、1960年代に復興運動が始まるまでは少数の人々により辛うじて伝承されていたのが実状である。韓国の伝統劇の中でもタルチュムは演劇としての必要条件が備わっており、最も代表的な位置を占めている。

タルチュムとは、仮面（mask）を意味する‘タル’と、舞（dance）を意味する‘チュム’による合成語であり、仮面舞または仮面劇と訳すことができる。しばしば学術用語として仮面劇という名称を用いる場合もあるが、それは仮面が使われる演劇全般を指す一般名称でもあるため、本稿では固有の意味を活かしてタルチュムと呼ぶことにする。

韓国では独立以来タルチュムの発掘と採録に対する努力が絶えず続いているにもかかわらず、現在まで明確な形として伝承されているものは十数作品にすぎない。タルチュムには日本の能楽にみられる流派のようなものはなく、地域によって多少異なる形態のものが分布しており、それぞれの地方の小演戯集団によって伝承されてきた。従って、タルチュムの類型は必然的に地域性と深く結びついている。

タルチュムの類型化および分類法については多くの先行研究があるが、それらの間にそれほど大きな違いはみられない。比較的特徴的な分類法としては、伝統人形劇の「コットゥガクシノルム」をタルチュムの一種類として位置付けている徐淵昊や李杜鉉の研究が挙げられる。徐淵昊は、先人達は古代から仮面と人形を同様のものとして認識し記録してきたと説き[18]、人形劇を仮面劇として分類すべきだと主張している。また李杜鉉は、人形劇の内容にみられる鋭い風刺やパロディがタルチュムのそれと類似していることや、クッのような祭儀の面影が残っていることなどを挙げ、人形劇をタルチュムと同一の系統として分類している[19]。

タルチュムの類型と分類を定めることは、タルチュムの起源を明らかにすることと共に、タルチュム研究の基礎的作業として非常に重要な取り組みであるが、それにはこれからも多くの議論が必要であろう。

本稿では、人形劇をタルチュムの下位分類ではなく、タルチュムと水平的な関係を持

15）韓国の人形劇は現在一種類のみが伝承されている。宋錫夏、崔南善、李杜鉉をはじめとするほとんどの古典劇研究者は、人形劇のルーツをインドか西域とみなしている。また中国、韓国、日本の人形劇を同一の系統とみる主張が一般的である。

16）パンソリのパンとは舞台・場という意味で、ソリは歌・声の意味を持つ。鼓手の伴奏と共に、唱優（歌い手）による語り調の歌が続く。呼吸の合った鼓手と唱優による二人舞台が基本である。

17）かつて影絵劇は古典劇の重要なジャンルの一つであり、朝鮮時代には寺を中心に仏教劇として広く演じられていた。

18）徐淵昊『コットゥガクシノリ』（ソウル：悦話堂、1990）、p. 6。

19）李杜鉉『韓国演劇史』（ソウル：ハクヨン社、1987）、p. 121。

つ芸能とみなす。つまりタルチュムの一種類としては認めていない。またタルチュムの分類は、その類型的分類にもつながる次の発祥地域別分類法を用いることにする[20]。

〔ソーナンクッ系統〕

(1)　分布地域：慶尚北道の北部、江原道の東海岸地域が中心

(2)　種類：「河回タルチュム」「江陵官奴仮面劇」が代表的

〔山臺ノリ系統〕

(1)　分布地域：中部地方のソウル・京畿道が中心

(2)　種類：「松坡山臺ノリ」「楊州別山臺ノリ)」が代表的

〔海西系統〕

(1)　分布地域：海西地方（黄海道）が中心

(2)　種類：「鳳山タルチュム」「殷栗タルチュム」「康令タルチュム」が代表的

〔五廣大（オーグァンデ）系統〕

(1)　分布地域：慶尚道の洛東江を境に西側、すなわち慶尚左道の地域が中心

(2)　種類：「固城五廣大」「統営五廣大」「駕山五廣大」が代表的

〔野遊（ヤユ）系統〕

(1)　分布地域：慶尚道の洛東江を境に東側、すなわち慶尚右道の地域が中心

(2)　種類：「水営野遊」「東莱野遊」が代表的

〔獅子舞系統〕

(1)　分布地域：咸鏡南道北青郡が中心

(2)　種類：「北青獅子舞ノルム」が代表的

以上、それぞれの系統において代表的な作品例として13種類のタルチュムを挙げているが、そのうち江陵官奴仮面劇を除く12種類は韓国の重要無形文化財として指定されている。

ではタルチュムが以上のような類型として定着するまでの変遷課程を、農村タルチュムから都市タルチュムへの移行という観点から考察してみよう。

初期のタルチュムは、すべて農村において農民の生活の中で演じられていた。本来タルチュムは民衆にとって生活の一部であり、あるいは生活の延長線上におかれていたことを意味する。演戯[21]の時空間はまさに生活の時空間だったのである。演戯の場所は実

20）拙稿「日・韓の伝統喜劇狂言とタルチュムの比較対照研究」（大阪大学修士論文、1996）、pp. 4－5参照。

21）本稿では演技とは区別して用いる。演者の演技のみならず、歌、舞、雑技などを含んだ総合的な意味として捉える。

際の生活の場であり、演戯の時間はまさに生活の時間そのものであった。

各地方のタルチュムの演戯集団は、ほとんどの場合が村の住民である農民であった。とりわけ農民層の中でも零細農民層によって行われていたが、他に廣大と呼ばれる芸人集団や奴婢などが参加する場合もあった。また官庁に隷属しながらも私奴婢に比べ比較的自由な身分であった官奴、官属と呼ばれる公奴婢もタルチュムの演戯に参加していた。

長年にわたり、このように農村を舞台に定着していたタルチュムは、朝鮮時代の後期、すなわち17世紀後半から次第に変化していくことになる。前述のように、17世紀以後は都市の発達に伴って近代的な初期資本主義社会へと徐々に移行しながら、民衆芸術が全般的に発展を遂げた時期である。

農村型タルチュムの変化には、農村においてタルチュムの公演に中心的役割を果たしてきた共同労働組織トゥレ[22]の変化が深く関連している。トゥレは朝鮮後期における社会的な生産構造の変化に伴い、二つの方向性へと変貌していくことになる。従来の共同組織を一層強化しようとする方向と、異なる共同体間において商品経済を模索する方向へと二分化していったのである。

それによってタルチュムの世界においても、従来の農村中心の閉鎖的な集団構造を持つ農村タルチュムの他に、地域や参加者の面で開放的な集団構造を持つ都市型タルチュムが誕生することになる。

前者の農村タルチュムは、トゥレ組織の特性からもうかがえるように、農民の生活の中で非専門的な集団である農民みずからによって「共に遊び、共に楽しむ」感覚で演じられていた。したがって公演場所が特定の地域に限定され、参加者も限られているという閉鎖的な側面を持っており、規模においてもある程度の限界があった。

他にも農村タルチュムには制約条件が多かった。例えば両班に隷属していた農民や廣大は、両班の許す範囲の中でしか表現の自由が与えられなかった。村祭り以外では演劇を公演することができない場合が多く、演劇を発展させるための経済力も持ち合わせていなかった。このように農村タルチュムは都市タルチュムに比べ小規模で社会的かつ経済的基盤も弱かったため、次第に衰退の道をたどることになったのである。

一方、比較的規模の大きい商業都市が形成され、人口と資本が集まることによって、タルチュムの公演場所も徐々に都市部へと移動していくようになる。主な観客層は農民から商人に移り変わり、公演の主宰や演戯集団の後援も商人が賄うようになる。やがてタルチュムは祭儀から民衆芸能へと変貌し、現代に伝授されているタルチュムとほぼ同

22) 韓国の農村で古来より伝わる共同労働のための組織。春の田植や秋の収穫期などに、農民同士が労力を提供し合って農作業に当る。単純な協業を目的とした生産共同体であると同時に、祭祀共同体、演戯共同体でもあった。現代の農村においても、トゥレは農作業の助け合いという形態として残っている。日本の「ゆい」に似ている。

一の形態を持つ「都市タルチュム」が成立したのである。

５．都市タルチュムと民衆意識の成長

それ以後タルチュムは、特定の農村を中心に閉鎖的な集団構造を持つ従来の農村タルチュムと、地域や参加者が広がり開放的な集団構造を持つ新型の都市タルチュムという二重構造が共存するようになる。しかし社会経済構造が急速に変わるにつれて前者から後者への移行が進み、その過程で変貌を成し遂げなかったものは次第に衰退して消滅することもあった。朝鮮時代後期に入ってからタルチュムが演じられた場所を調べてみると、純粋な意味での農村は極端に減少し、ほとんどが商業や交易の中心、交通の要所、または行政の中心地であったことがわかる。

従来の農村型タルチュムに比べ、公演場所や参加者が拡大した新型のタルチュムの発生に伴い、演戯集団にも新たな形態の集団があらわれる。タルチュムの演戯を専門的に、また広範囲において行う放浪芸人の集団「男寺党」が登場するのである。

男寺党は、公演の依頼があればどこへでも出かけていき、またそれを求めて放浪の旅を続ける。興行を目的とした演戯、官行事への参加など、いわばタルチュムの巡回公演を始めたのである。また農村地域から演技者をスカウトし、放浪芸人として訓練を行うなど、農村におけるタルチュムの都市志向を助長することにもつながった。
また都市型タルチュムにおいて演戯集団が開放的な形態をとるようになってから、新たな演戯同伴層として商人や吏属[23]、また没落両班層などが参加するようになった。農村タルチュムが都市タルチュムへと移行を遂げながら、その主導層も変化していったのである。

例えば松坡山臺ノリでは、主に商人層が演戯、主宰を担うようになるが、このような商人主導型タルチュムでは、商権の維持が目的となっており、それぞれ主導者の利益に見合った内容が強調されることになる。また両班よりは下層民であったが常民に対しては強い権限を発揮していた中人の吏属が、タルチュムに参加し、主宰することになる。

そのような変化について、チョン・キョンウクは、伝承者からの採録を中心に次のように記述している[24]。

①鳳山タルチュムは、19世紀末から20世紀のはじめにかけて黄海道におけるタルチュムの最高峰を形成するに至った。それに貢献した人物として、イ・ソング、イ・チャンサン父子の名を挙げることができる。イ・ソングは鳳山官庁において執事とい

23）朝鮮時代の役職名。正規の官僚任用法によらない下級の役人を指す。身分的には両班と常民の間の中人に属する。高麗時代に地方の行政実務を担当した卿吏の名残りとされる。
24）チョン・キョンウク『韓国仮面劇、その歴史と原理』（ソウル：悦話堂、1998）、pp. 162－163。

う下級官属についていた人物である。

②名演技者キム・ジンオク（1894－1969）の報告によると、鳳山では世襲された地方吏属（主に執事や将校）らがタルチュムに携わり、常民が加わる場合には参加料を払わなくてはならなかったとされる。

③東莱野遊は、吏属らの親睦団体である耆英会の後援を受けて維持されていた。吏属らは財力があったため、タルチュムに関連する経費を支援することができたのである。

①と②は、鳳山タルチュムに下級官属が演技者として参加したことをあらわしている。特に地方の実力者である吏属の参加により、タルチュムの公演や演出が有利な条件で進められ、それに伴い演戯の水準向上にもつながったと考えられる。

吏属とは、前述のように地方行政の実務者である官吏を指すが、一般に、その地方の有力者により世襲されていた。また執事は、軍校、軍官、将校に分けられるが、軍営と地方官庁に従事した属役である。朝鮮時代後期には将校層が執事層から分離したが、これは軍官の帰属性が弱化し、常民や賤民により充員されたためである。つまり執事は吏属の中では身分的に比較的低い立場であったが、常民よりは遥かに強い権限を持っていた階層であった。

このようにタルチュムの主導層または後援層として商人や吏属という新たな階層が登場することにより、タルチュムは新しい段階に入ることになる。すなわち、タルチュム主導層の生活理念を反映する内容や形式へと変化していったのである。

また都市タルチュムが専門化し、特に商業性を強く帯びるようになってからは、出演者の構成においても制限されるようになった。したがって、演戯集団の開放性という観点でみる場合は、それ以前の農村タルチュムに比べてむしろ閉鎖的になったともいえる。例えば鳳山タルチュムの場合、「老長（高僧）、チーバリなどのような重要度の高い役は吏属の中で有力な者が演じていた」。「地方吏属どうしでタルチュムが代々行われてきており、常民が参加しようとする場合には金を払わねばならなかった」[25] などの口碑資料がそれらを物語っている。

またそれらの階層が、利益を追求する方法としてタルチュムを利用することもあらわれ、タルチュムの表現理念からかけ離れた要素を持ち合わせる場合もあったことは否定できない。とはいえ、タルチュムの巡回公演、商業行為を目的とした興行、官行事への

25）李杜鉉『韓国の仮面劇』（ソウル：一志社、1992）、p.183。

参与など、さまざまな公演状況によってタルチュムの理念が変化するということは、自然なことであるともいえる。

またタルチュムの演戯集団としては、前述したようにタルチュムを職業的に演じる男寺党のような組織が新しく生まれる。それによって公演の時期も、従来の祝祭日だけでなく便利な時期が選ばれるようになった。

男寺党は演戯ができる場所を求めて放浪の旅を重ねたが、それによってタルチュムの演戯がまだ生成されていない地域ではその発生を促し、また閉鎖的なトゥレ演戯が続いている地域では互いに影響や刺激を受け合うことになる。タルチュムの演戯が、閉鎖的な流通構造より開放的な流通構造へと移行していったことを意味する。

このような新しい芸術同伴層の台頭や参与は、タルチュムの内容を前近代的なものからより近代的なものへと変革させただけでなく、演戯方式や表現様式においてもさまざまな変化をもたらした。タルチュムを普遍化させ、芸術性を高める上で重要な役割を果たしたのである。

表現様式においては、舞がより精巧になり伴奏音楽も専門性を帯びるようになるなど、全体的に洗練された技巧が駆使されるようになった。装飾に関しても娯楽的な興行色が強まるにつれ、仮面や衣裳などがより派手なものになっていった。

何よりも重要な変化は、タルチュムを取り巻く環境のみならず、タルチュムの内容に当代の民衆の要望が盛り込まれるようになったことである。現実的な生活感覚を持ち、かつ政治的、社会的、経済的感覚に敏感であった商人や吏属、没落両班層などによって、成長していく民衆意識の様相がタルチュムの中に確実に反映されることになったのである。

例えば都市タルチュムをみると、マルトゥギ[26]やチーバリ[27]などの人物が登場し、劇の中心勢力となってタルチュムの流れを主導する。これらは商人や吏属階級、あるいは自意識を持ち始めた民衆を典型化させた象徴的な人物像である。

農村共同体のタルチュムは両班の虚勢を滑稽に描くことにとどまるが、都市タルチュムはマルトゥギを登場させ民衆意識を鼓舞する。農村タルチュムである河回タルチュムに出てくるチョレンイやイメ[28]が、鳳山タルチュムや楊州別山臺ノリにおいては民衆を代弁するマルトゥギに取って代わる。農村共同体のタルチュムから都市タルチュムへの変貌が、民衆意識の成長という観点からみれば非常に重要な意義を持っていることが分

26）喜劇（commedia dell'arte）に登場するずる賢い召使いや、狂言の太郎冠者に相当する喜劇中の下男像の典型である。支配層である両班の虚勢と無知を暴露しては場内の笑い者へと貶める。この人物像は、民衆の不満と欲求を代弁する分身といえる。

27）酒好きの破戒僧。高僧である老丈に遊女をおくり誘惑し、その権威を失墜させる。マルトゥギとともに、民衆の精神を代弁する人物像である。

28）二人とも両班の下男。特にイメは「パボタル（アホ面）」といわれる。

かる[29]。

このように両班に対する風刺が、マルトゥギという民衆的反抗の象徴ともいえる人物を通じて行われるようになったことこそ、民衆意識が成長していく様子を如実に反映している。民衆の活力をマルトゥギという躍動的な人物に集約させ、自らを抑圧する封建的特権に向けて風刺と滑稽に満ちた笑いを飛ばしたのである。それは、封建体制がこれ以上維持されにくい状況にあるということと、民衆の解放が間近に迫っていることを間接的に物語っているのである。

6．おわりに

17世紀以後、度重なる外国からの侵略を被った朝鮮王朝は、社会の基盤を成していた身分制度や地主制度が揺らぎ始め、次第に社会的混乱が増大していく。常民や賤民など被支配階級の身分上昇が起こると同時に、商品貨幣経済の活性化に伴い財力を持った商人が出現する。また当時の身分体系の中で支配層の両班と常民の間で存在感の希薄だった吏属階級が頭角をあらわしていく。

財力を持った商人の出現と吏属階級の台頭は、さらに身分制度の混乱と支配層による統制力の弱化を招き、民衆の自意識、すなわち民衆意識の成長をもたらすことになる。また、農村を中心に常民に広く親しまれていたタルチュムに、吏属階級や影響力を増してきた商人が参与することになり、農村共同体のタルチュムは次第に近代的な要素を帯びるようになる。

彼らがタルチュムを主宰し、また演ずる集団として台頭したことで、タルチュムの本来の担い手は農民層から離れ、多様な変貌を遂げていく。タルチュムは農村から都市へ、農民から商人や放浪芸人へと伝承され、また変遷していったのである。

朝鮮時代後期の様々な社会変化の中で、タルチュムは農村共同体における純粋な民俗芸術の次元から都市型へと移り変わり、またその表現理念においては近代的現実主義と成長していく民衆意識が色濃く反映されることになる。結果として、都市タルチュムの成立と普及は、農村におけるタルチュムを衰退させる役割をも果たしたが、当代の社会変化と民衆意識の成長に多大な影響を及ぼしたのである。

【主要参考文献】

李萬甲「韓国農村の社会構造」『韓国研究叢書』第5集、1960。
李杜鉉『韓国演劇史』、ハクヨン社、1987。
李杜鉉『韓国仮面劇』、文化財管理局、1969。
李杜鉉『韓国の仮面劇』、一志社、1992。

29) 河回タルチュムのチョレンイやイメは単純な下男として登場するだけで、マルトゥギのような痛烈な風刺はほとんど行わない。

具滋均『韓国平民文学史』、大光文化社、1974。
徐淵昊『コットゥガクシノリ』、悦話堂、1990。
佐竹昭広『下剋上の文学』、筑摩書房、1982。
イ・ホチョル「朝鮮時代農業史」『韓国の社会経済史』、ハンギル社、1987。
キム・ヨンソブ『朝鮮後期農業史研究２』、一潮閣、1971。
チョン・ソクチョン「朝鮮後期社会身分の崩壊」『大同文化研究』第９集、成均館大学、1972。
チョン・キョンウク、『韓国仮面劇、その歴史と原理』、悦話堂、1998。
チョン・ビョンホ「民俗舞踊の舞に関する研究」『韓国民俗学』10号、民俗学会（韓国）、1977。
拙稿「日・韓の伝統喜劇狂言とタルチュムの比較対照研究」（大阪大学修士論文）、1996。